

# 伊太利とこころぐ (二三)

瀧川規 一

〔南歐詩人の群〕 フロレンスで詩聖ダンテと佳人ベアツリスの兩家を訪れ彼等兩人の抽象的にして且つ具體的なる戀愛の存在を論證しなればならなくなつた。論證の課程として既に古代希臘の男性友愛の關係を説きプレートの哲學的戀愛を述べた。ダンテに接近する時代に於て南佛北伊に亘つてツルバツールと總稱せられた詩人の群が居り異性に對する具象的或は抽象的な戀愛の雰圍氣を作つたことも述べた。今これ等の詩人群の主要なる人物を列舉して彼等が如何なる生活をなしたかを概説したい。

(一)〔ポアチエ伯ギレム九世〕 彼は一〇七一年に生れ一〇八七年より一一二七年までポアチエ(Poitiers)伯としてアキタイン(Aquitaine)公として自己の領土に君臨してゐた。ツルバツール

詩人群中の最初の詩人として知られまた詩人に對する最初のバトロロンであつた。歌を謠ふことも出來、詩を作ることも出來た人であつた。一一〇一年齡三十歳にして三十萬の十字軍を率ゐて遠征の途に就いたが軍利あらず陣容を亂して國に歸つた。敗軍の將たる悲を紛らすに専ら歌と女とを以てした。軍營にある時は勇猛果斷にして才氣煥發し傍若無人の態度を敢へてなし常に義俠心に富み且つ人に接して愛措よい點に於て何人の追隨をも許さなかつた。生來の美容は衆士に伍して異彩を放ち其様子を見て詩人は人間の群の間に神の濶歩するが如しと評した。常に國領内を遍歴し彼が生來の才氣と美容とを以て不可抗の魔力を發揮し幾多の婦人を誘惑し戀着した。後世人が以て輕跳浮薄なりと考ふべ

き彼の一舉一動は詩人を悦ばしめ驚歎の的となつた。就中、ニオル(Niort)に愛の神ヴィナスの爲めに殿堂を建てんと企てたが如きは彼の突拍子もない行爲の最顯著なものである。現存の彼の詩は詩形單純であつてツルバツールのうちでも後期の詩人等が示したが如き技巧と複雑性とを有てゐない。詩作に精進し素人詩人と見做されることを欲しなかつた。彼の詩の多くは自己個人を材料にし肉感性を暴露し變化に富み詩才の巧さを示してゐる。

(二)「ベルナル」最初のツルバツール・ポアチエ伯の息子は詩人でもなくまた詩人のバトロンでもなかつたが、その娘が父の後を追うて詩人の庇護者となつた。娘はギエンヌ(Guienne)のエリナ(Eleanor)と呼ばれる婦人であつた。彼女の宮廷ではヴァンタジュール(Ventadour)のベルナル(Bernart)が詩人として頭角を顯はした。この詩人はツルバツールの大多數が貴族であつたに拘らず身を下賤から起した詩人であつた。詩人の父はヴァンタジュールの子爵エルブ

二世(Elbe II)の城にて子爵に仕へて臺所の皿洗をしてゐた男の倅であつた。城主は自ら詩人であつて詩歌に非常に巧であつたと云はれてゐるが其詩は現存してゐない。兎に角城主は臺所男の倅が詩才を有することを知り、これを詩人になさんと欲して訓練した。城主の妻アン(Agnès)は非常な美人であつて、年若きベルナルの心を魅了した。兩人は幼少の頃から秘かに戀愛關係に陥つてゐた。この情熱を歌つた詩は現存の中世の詩歌中最も歎賞すべきものだと言はれてゐる。城主は遂に兩人の情的關係を發見しベルナルを城から追ひ出した。詩人ベルナルはギエンヌのエリナに身を寄せた。このエリナは一一五二年に英國王ヘンリ二世の皇后となつた。ヘンリ二世も亦詩歌の保護者であつた。ベルナルは英國王及び皇后の御伴をして英國に渡つたらしい、ベルナルはツールーズ(Toulouse)のライモン五世(Raymond V)の城に行き一一九四年城主の死するまで其處に留まり城主の死後ポアツ(Poitou)のダルー(Dalou)に

ある僧院に退き老齡を以て生を終つた。

(三)「ヅ・ポルン」ヘンリ二世の子ヘンリ・カートマントル(Henry Curmantle)も亦ヘルトラン・ヅ・ポルン(Bertran de Born)と云ふ詩人を庇護した。この詩人はもとペルゴール(Pergord)のホーフォール(Hautefort)と云ふ土地の子爵であつたが前記のエリナと英王ヘンリ二世との結婚によつて英國の臣下となつた。ダントはこの詩人と地獄で會つてゐる。其時のヅポルンの様子は實に奇怪である。彼は切られた自分の首級を提灯の如くぶら下げてもつてゐたとダントは云つてゐる。ヅ・ポルンは英國王の三皇子に互に嫉妬心を抱かせるやうにし陰謀を企てたと世に信じられてゐる。ダントは従つて舊譯聖書に載つてあるやうにデヴィッドの兒等が父に反對するやうに教唆したアキトフェル(Achtophel)に比してゐる。

プリンス・ヘンリ(Prince Henry)が一一八三年に死んだ時ヅ・ポルンはプロヴァンス文學に於て最ましき最眞面目な二篇の歌を作つた。詩

伊太利ところぐ

人は其後間もなくリチャード・クル・デ・リオン(Richard Cœur de Lion)の爲めにホーフォール城で包圍されたが、リチャードとの和解が成立しバレンスタインの聖地まで遠征に随伴した。一二〇五年頃に死歿したが老齡には信仰心を篤くしたと云はれてゐる。歐洲の政治界に活躍して能動的要素となり諸王の友人となり或は敵となり、軍人としては傭兵隊長(Condotiere)となり多くのツルバズール詩人群中毛色を異にしてゐる。

(四)「ベアトリックス」プロヴァンスの上流社會には女流詩人の群もあつた。其中最顯著なるものはディー(Die)の伯爵夫人ベアトリックス(Beatrix)である。彼女は同じくツルバズール詩人に屬するオレンジ(Orange)伯ラムボー三世(Rambaut)と切つても切れぬ關係を結んでゐた。ラムボーは「アダムが禁制の林檎を食べべて以來詩に於て自分と競争し得る詩人は未だ生れなかつた」と亂暴な法螺を吹いてゐた。然し現存のラムボーの叙情詩は相手の有名な女性愛

人ベアトリックスの叙情詩程に優美と巧緻とを示してゐない。ベアトリックスの詩は當時稀に見る美しき單純な形で作られてゐる。

(五)「セルカモン」ポアチエのギレム九世の城内にはセルカモン (Cerramon) と云ふ詩人が仕へて居つた。この詩人は有名なマルカブルン (Marcabrun) と云ふツルバズール詩派の最獨創的な詩人の師であつた。

(六)「マルカブルン」マルカブルンは一一二〇年頃から一一九五年迄生存して居つて四十篇ばかりの詩が現存してゐる。この詩人はガスコニ (Gascony) の或る富家の戸口に捨てられた棄兒であつて何人も其血統を知らない。然し古典プロヴァンスの嚴格なる詩風は主として彼によつて産まれ、ツロバル・クルス (Trobar clus) と稱せられる複雑精妙なる詩形も亦彼によつて創始された。詩の改新主義者であつたが戀愛に對しても斬新な風變りの態度をとつた。即ち彼のとつた態度は劇しき女嫌ひであつた。「自分は愛したことも愛されたことも決してなかつた」

と彼は云つた。情歌を作つても女性を嫌ふ心地を表白した。「飢饉疫病及び戦争と雖も婦人の戀愛程には世に禍せず」とは彼の箴言である。マルカブルンは最初リチャード・クール・ド・リオンに仕へ一六七年以後はアラゴン (Aragon) のアルフォンソ二世 (Alfonso) に仕へた。彼は諷刺の筆をとつたので嫌惡され非難の的となり或は殺されたとも或は天壽を完うしたとも傳へられてゐる。

(七)「ルーデル」マルカブルンに愛され「美わしの詩人」と呼ばれたブレ (Blave) のジョーフル・ルーデル (Jaufre Rudel) が居る。この詩人はトリポリ (Tripoli) の婦人と稱せれる一貴婦人に日廻り草の花の如く媚の顔を向けたと傳へられてゐる。十字軍の遠征に加はり聖地に至つたことがある。現存の詩は數篇に過ぎないが詩は神秘的調子を帯びてゐる。ルーデルは信仰心篤く信仰心を表現するに只當時流行の愛情の辭句を藉りた丈けであり詩作は神聖なる目的を表はす手段に過ぎなかつたのではないかと

想像されて居る。其「遙か彼處なる王姫」と題するものは基督教會を表はし、ツリポリの婦人の腕に抱かれて死ぬと云つたのはアンチオーク (Antioch) のどこかの聖院に入つたことを歌つたのではないかと云はれて居る。

(八)【ペール・ダルヴオーナ】 Peire d'Alveona を英譯すればオーベルヌ (Auvergne) のピータ (Peter) である。彼はマーカブルンの如く下賤から身を立てた人である。父はクレルモントフェラン (Clermont-Ferrand) の商賣人である山間地方に現はれた最初のツルバズールである詩人は美男子であつて接する人々を魅する力をもつてゐた。オーベルヌ地方の貴族及び貴婦人等にもてはやされ尊重された。然し本人は自負心強く他の詩人等を蔑視してゐたと云ふ。カスチール (Castile) 王サンチヨ三世 (Sancho III) の宮廷及び後にはナルボンヌ (Narbonne) の子爵夫人エルモンガール (Ermenegarde) の宮房に奉仕した。

(九)【ダニエル】 ダンテが地獄篇で口を極め

伊太利ところぐ

て反覆賞辭を呈してゐる、アルノー・ダニエル (Arnaut Daniel) と云ふ詩人である。ペリゴールのリベラック (Riberaç) と云ふ地の一騎士でありツルバズールとしてリチャード・クール・ドオリンに附屬してゐた。ダンテはギド・ギニチエリから詩人の作品が非常に復雜にして玄妙なる詩風であることを知つた。伊太利文學史ではこの詩人によつて中世詩と近代詩との間に橋が架せられたのだと稱してゐる。ダニエルは言葉を完成した工人であり鍛工であると云はれ、また戀愛を歌つた詩人中最偉大なる詩人であるとさへ云はれてゐる。ダンテの悦んだのはプロヴァンスの詩形が彫琢を加へられた輝しさであつた。現存の十七篇の詩はダンテの賞讃せし程卓越したものでなく加ふるにその傳記の詳細が傳はつてゐない。後世研究家の奇怪とする處はダンテがダニエルを賞揚して其競争者たるジローヅ・ボルネル (Giraut de Bornelh) を貶してゐる點である。ダンテはボルネルの廉直にして高潔なる道德的金言の詩を作る點を認めてゐるが

ダニエルの詩の方がよいと云つてゐる。然し後世の批判では其逆を信じられて居る。

(十)【シロー】シローはリモージュ(Limoges)附近の出身であつて一一八〇年頃に西班牙に入りアラゴン(Aragon)のペドロ(Pedro)二世及び其他西班牙の諸侯の宮廷で有名となつた詩人である。リモージュの子爵に憎まれ其藏書を奪はれ住家は焼かれたので彼は詩に於て身の悲運を嘆き時代の残酷と諸侯の無法とを訴へた。彼は一二三〇年頃に姿を消してゐる。

(十一)【アーノート・デ・ベズィエール】Arnaut de Mareuil と云ふ詩人は佛國西南部の出身でありプロヴァンスの詩に戀文をはじめて將來した人である。ツールース及びベズィエール(Beziers)の兩宮廷に落着いてゐたが伯爵夫人アダラシア(Adalasia)に對し熱烈なる戀情を歌つた。同夫人にはアラゴン王アルフォンソ(Alfonso)二世と云ふ危険なる色敵があつた。詩人は身の危険を避けてモンペリエ(Montpellier)に逃れ其處で伯爵ウイリアム八世の保護を受けた。然しモ

ンペリエでも依然としてアダラシアに對する戀情を歌ひ續けてゐた。斯くも熱烈な戀情の對照物たるアダラシアは一一九九年に死んで居り其後の戀歌が現存してゐない點から推して、その頃には既に詩人も世を去つてゐたのではないかと思はれる。

(十二)【ペール・ヴィダル】ツルバズール詩人の群のうちで最も無頓着な迂濶な詩人として後世に名を垂れてゐるものがある。其詩人はツールーズのペール・ヴィダル(Peire Vidal)である。彼は凡ゆる世界中での最も狂氣じみた詩人であると言はれてゐる。佛蘭西、西班牙の各地を困窮しながら放浪した後遂にマルセル(Marseilles)に定住したが、一一八〇年に其處の子爵バル・ヅ・ボー(Barral de Baux)の夫人アザライス(Azalais)に竊かに接吻したので夫人の機嫌を損しゼノアに逃げたが矢張伯爵夫人を戀歌の對照物として詩作を續けて居た。伯爵の懇請によつて夫人は詩人の罪を赦したので詩人はマルセルに再び歸つて來た。彼は失策

をなすこと算なく其が爲めに却つて有名となつた。ルーヴ (Louve) と云ふ一婦人に戀し、其婦人の名が雌狼の語義を有する點から自らを雌狼の姿に装ひ婦人に接近せんとしたが婦人の居城の前で婦人の準備した獵犬の群に追ひ立てられて命辛々逃げた。また或時十字軍に加つてシブルス (Cyprus) に滞留し土地の希臘人の娘と懇を通じ遂に結婚した。其娘は一王家の後裔であると聞かされたので自らを皇帝の稱號を以て呼び軍營から軍營へ玉座を運んで歩いた。彼の奇しき冒險も一二年頃ハンガリ國に入つて終を告げてゐる。彼は詩界のドンキョットである。

(十三)「フオルクエット」 マルセールにはも一人ツルバズールが居つた。伊太利出身のフオルクエット (Folquet) が其れであつてゼノア商人の息子である。マルセールの美しき伯爵夫人アザライスの寵を求め前述のヱイダルと競争の立場にあつた。彼はまた不幸なるモンペリエの皇后ユドキシア (Eudoxia) の周圍に集つたツルバ

伊太利ところぐ

ズールの一人であつて、皇后が奇しきロマンチックな一生を一一八七年に終られるまで奉仕した。一一九二年に子爵バラル・ヅ・ボーが死んだ時には非常に感動的な詩を作つて居る。子爵の死後間もなく詩人は人生觀を一變した。戀愛が嫌になつた。愛慾を棄て、聖職に入つた。プロヴァンスのトロネ (Toronnet) にある富裕なるシスタシアン (Cistercian) 派の修道院の院主となり一二〇五年にはツールーズの僧正となつたツールーズではシモン・ヅ・モンフォール (Simon de Montfort) と共にアルビゼンシズ (Albigenses) 派の教徒を虐殺した。彼によつて殺された教徒は合計無量五十萬人であると稱せられてゐる。この教徒の主張は斯うである。人間と物質とは全然惡であり基督は只靈に於て存在するのみである。人間が罪惡より逃んと欲するならば結婚を禁じ専ら禁慾克己を主としなければならぬと云ふのである。政治的には羅馬教會の宗教政治に反對しその許にある基督教の信仰及び道徳を全部否定した。彼等は地方民及び封建

空

六三

諸侯の援助を得たが羅馬から睨まれた。一二〇八年には羅馬法王インノセント三世 (Innocent III) はこの教徒に對して十字軍を起すことを説き勧めた。其口車に乗つた者はシトー (Citeaux) のアーノルド (Arnold) と前記のシモン・ツ・モンフォルである。教徒虐殺は一二〇九年より二九年に至る二十年間繼續し一二四五年に漸く教徒の立籠つた本城モン・セゲール (Mont Segur) が落域した。斯くこの一派は一人も残さず虐殺され殺された人数は既述の五十萬である。吾が國の天草騒動の如きは足許にも寄りつけない。この教徒をアルビセンシスと稱するは南佛アルビ (Albi) に最も多く集つてゐたからである。フォルケは一二三一年僧正區にあるグララセルヴ (Grandseigne) の僧院で世を去つた彼の遺した詩はプロヴァンスの詩の廢退期の徴を示すものであると見做されてゐる。ダンテはこのフォルケに天國で會つてゐる。而して興味を以て彼を注目してゐる。ダンテはこの大虐殺の非基督教的行爲を知らなかつたのかも知れない。

(十四)「フエヂット」リモザン (Limousin) 地のウチェルク (Uzerche) 出身のモーセルム・フエヂット (Ganceelm Faidit) と云ふ詩人がある。彼は陽氣に諸國を遍歴し「愛の光」と稱して一情婦を随伴せしめた。この行爲は世の注意と非難とを招き其女性は諷刺と嘲笑の的となつた。然し詩人の作詩にあらはれた愛の對照物はこの情婦でなくヴァンタジュールのマリアと云ふ名門の娘である。詩人は伊太利に入りモンτροφエラット (Montferrat) のボニアアーチエ (Boniface) 侯の宮廷に入つた。この侯爵はツルバツールを獎勵し一二〇一年には十字軍の指揮をなした人である。侯爵に伴つて詩人は聖地に於ても尚マリアの歌を作つてゐた。安全に故郷に歸り一二四〇年頃に世を去つた。今日現存せる詩は六十篇である。

(十五)「ライムボー」モンτροφエラットの宮廷にはライムボー (Raimbaut) と云ふヴァスキエール (Vasquieres) 出身の詩人も亦居つた。この詩人の愛の目的物は侯爵の妹ベアツリックス



であつた。彼は不幸にも聖地で死歿してゐる。

(十六)「ソルデロ」 伊太利出身のソルバツールでダンテからブラウニング (Browning) に至る後世詩人によつて推賞されてゐる十四世紀初頃の詩人が居る。この詩人はマンツア (Mantua) 生れのソルデロ (Sordello) であつて、詩の獨創と卓越とによつて忘る可からざる人物である。以上の詩人は文學史上時人の評價と後人の評價とが略一致してゐる詩人であつて四百餘人の詩人中錚々たるものである。

(十七)「カベスタン」 ギレム・ツ・カベスタン (Guillem de Cabestanh) と云はるゝ詩人はルシロン (Roussillon) の騎士であつてカステル・シロン (Castel-Roussillon) の伯爵夫人セレモンダ (Seremonda) に愛を寄せた。それを知つてゐた伯爵は狩獵場で詩人を見るや忽ち嫉妬の發作を起して詩人を殺ろした。伯爵は詩人を殺ろした丈けでは胸が納まらない。詩人の心臓を切り取つて之を料理し味をつけて夫人の食卓に上せた夫人セレモンダはそれとは知らずいつもの

如く夫君の狩の獲物を賞味し食卓上の禮儀として讚辭を呈しつゝ食へ盡した。夫人は斯く知らずして愛人の心臓を食ひ盡した時伯爵は夫人と詩人との間に行はれた事柄を暴露し彼女の喰つたものが何であるかを告げた。彼女は忽ち氣絶した。暫して正氣に歸つて夫人は云つた。「夫君よあなたは非常によい御馳走をして呉れましたから妾はも一皿と食べませぬ」と云つてお城の窓から身を投げて死んだ。これを聞き知つて附近の貴族等は伯爵に對し非常なる反感を抱き遂に協力して西班牙王アルフォンソを先頭にして伯爵を驅り廻し遂に伯爵を殺した。貴族等は伯爵を殺した丈けで満足せず更にペルピニアン (Perpignan) の伽藍サン・ジャン (St. Jean) で盛大なる葬儀を行ひ詩人と夫人の兩屍體を相並べて比翼塚とした。後世の物好きはこの墓を巡禮札所としてゐる。斯くすることがソルバツールの詩心の寛容を示したのであると云はれてゐる

(この項つゞく)